

名古屋市港文化小劇場芸術公演  
ニンフェール第6回公演  
～**ACTIONS**～

*NymphéArt* features

Kuniko Kato, percussion

with composers, Hiroyuki Yamamoto, Miyuki Ito & Kumiko Omura  
and Nate Pagel (video), Hiei (interactive graphics) & Atsushi Yoshikawa (interactive video)

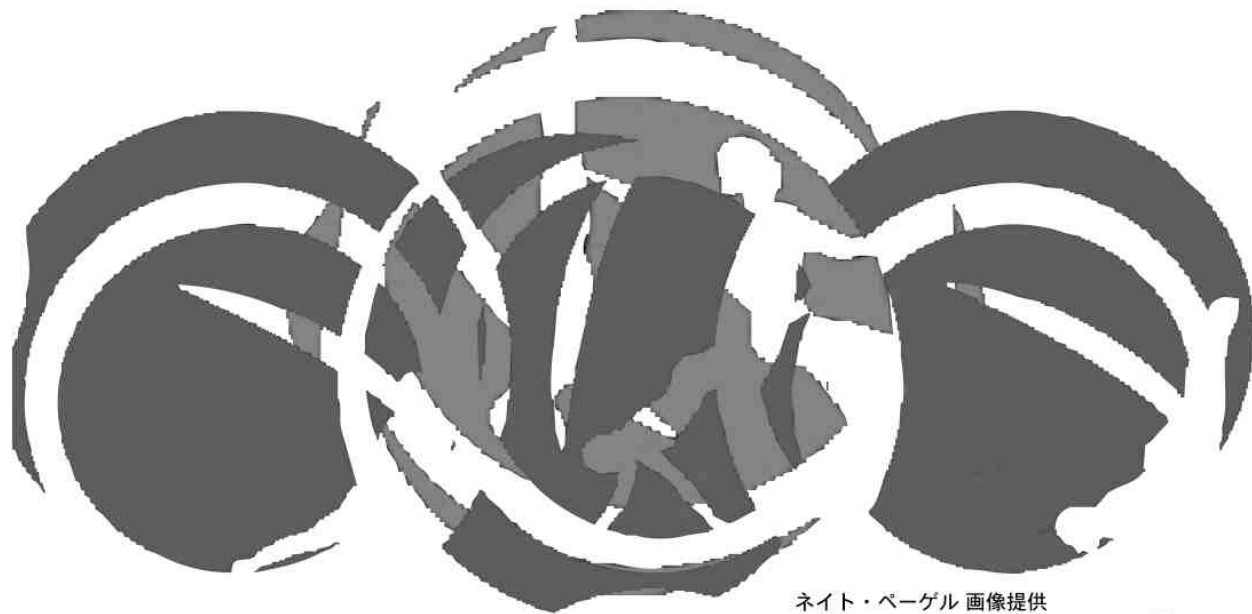
**加藤訓子 (打楽器)**

山本裕之 (招待作曲家)

伊藤美由紀 (企画/作曲)、大村久美子 (企画/作曲)

ネイト・ペーゲル (ビデオ)、

HIEI (インタラクティブ・グラフィックス)、吉川敦 (インタラクティブ・ビデオ)



ネイト・ペーゲル 画像提供

2010年5月29日(土) 13:30開場/14:00開演  
名古屋市港文化小劇場

主催：ニンフェール、(財)名古屋市文化振興事業団  
*Nagoya City Minato Playhouse, Saturday, May 29, 2010, 2:00pm*

後援：名古屋芸術大学音楽学部  
録音・音響協力：名古屋芸術大学音楽学部音楽文化創造学科サウンド・メディアコース



**「友の会」会員募集中！エンジョイコース 年会費3,000円**  
名古屋文化振興事業団では「友の会」会員を募集しています。会員になるとチケットの割引・発行優先、特典などの様々な特典があります。http://www.bunka78.org.jp/

～ ごあいさつ ～  
GREETING

本日はお忙しい中、ニンフェアール第6回公演にご来場頂き、有り難うございます。

2005年の第1回演奏会から毎年続けられましたのも、ご来場下さる聴衆の皆様の暖かいご支援の賜物であり、関係者一同、心から御礼申し上げます。

今回の演奏会は、豊橋市出身で、現在アメリカを拠点として国際的な活動を続けていらっしゃる打楽器奏者の加藤訓子さんを迎え、打楽器という、身体の動きと密接に関わる演奏会であることから、「ACTIONS」という公演名でお送りする事となりました。

プログラムには、今は亡きイタリア現代音楽会の巨匠、フランコ・ドナトーニの作品、トロンボーン奏者としても知られている作曲家、ヴィンコ・グロボカールのボディーパフォーマンスによる作品、加藤さんがこの演奏会の為に、作曲者から直接許可をとってビブラフォンと電子音響版にアレンジした、アメリカの作曲家のスティーブ・ライヒなどの海外作品に加え、ゲスト作曲家として、内外の作曲賞を受賞して国際的に活躍、現在、愛知県立芸術大学で教鞭をとっている、山本裕之さんを迎えます。さらに、作曲メンバーの伊藤の、独特の繊細な音楽に映像を伴う作品、大村の、スネアドラム一台からリアルタイムの変調によってその音響が拡張される作品など、多彩なプログラムでお送りいたします。さらに、ドナトーニ、大村、伊藤作品には、それぞれ、日栄一真、吉川敦、ネイト・ペーゲルが、映像を制作しました。加藤訓子さんの繊細かつダイナミックな「ACTIONS」によって生み出される音楽と、若き芸術家達の織りなす映像の世界を、是非、ご堪能ください。

2010年5月29日

ニンフェアール



～ プロムラム ～  
PROGRAM

1. ヴィンコ・グロボカール：「コルポレル」（1985） ボディーパフォーマンスの為の  
Vinko Globokar : *CORPOREL* (1985) for body performance
2. 大村久美子：「波動と粒子」（2009） スネアドラムとライブエレクトロニクスの為の [日本初演]  
Kumiko Omura : *Wave and Particle* (2009) for snare drum with live electronics
3. フランコ・ドナトーニ：「オマール」（1985） ビブラフォンの為の  
Franco Donatoni : *Omar* (1985) for vibraphone
4. 山本裕之：「輪郭主義 II」（2010） ビブラフォンと電子音響テープの為の [世界初演]  
Hiroyuki Yamamoto : *Conturism II* (2010) for vibraphone and recorded electronics (WP)

～ 休憩～

5. エドムンド・カンピオン：「ルージング・タッチ」（1994） ビブラフォンと電子音響テープの為の  
Edmund Campion : *Losing Touch* (1994) for vibraphone and stereo tape
6. 伊藤美由紀：「空間透明度 I」（2010） ビブラフォン、アンティーク・シンバルと電子音響の為の [世界初演]  
Miyuki Ito : *La transparencia del espacio I* (2010)  
for vibraphone, antique cymbals and recorded electronics (WP)
7. スティーブ・ライヒ：「ヴァーモント・カウンターポイント」（1982）  
ビブラフォンと電子音響版 (2010) [世界初演]  
Steve Reich : *Vermont Counterpoint* (1982)  
version for vibraphone and electronic sound (2010)

出演：加藤訓子（打楽器）

吉川敦（インターラクティブ映像 \* 2）

HIEI（インターラクティブ・グラフィックス \* 3）

ネイト・ペーゲル（映像 \* 6）

録音・音響協力：名古屋芸術大学音楽学部音楽文化創造学科サウンド・メディアコース  
ニンフェアール(企画)：伊藤美由紀（作曲/コンピューター）  
大村久美子（作曲/コンピューター）

## 1. ヴィンコ・グロボカール：「コルポレル」（1985）ボディーパフォーマンスの為の

ヴィンコ・グロボカール（1934-）は、スロヴェニア系フランス人の作曲家、トロンボーン奏者、指揮者。作風は、自らトロンボーン奏者であることもあってか、身体性を重視し、楽器の演奏技術を拡張し、さらにジャズやフリー・インプロヴィゼーションという背景を反映して、不確定で即興を伴う作品も多い。この作品「コルポレル」は、打楽器奏者によって演奏されるが、打楽器をいっさい使わず、身体のあるあらゆる面をたたいて、多彩な音色を引き出し、様々なリズムのコンビネーションを生み出す。視覚的にも音楽的にも楽しめる作品である。“ボディーパフォーマンス”という、ただやみくもに熱く演奏するものを想像しがちであるが、加藤氏はこの作品の演奏に際して「体そのものを使うことと曲の深さとがかなり直結してくるので、あまりのめりこみ過ぎないように気をつけています。」とコメントしており、ここに加藤氏の、ある種の客観性を常に保って演奏しようとする姿勢が伺える。（大村久美子）

## 2. 大村久美子：「波動と粒子」（2009）スネアドラムとライブエレクトロニクスの為の [日本初演] 吉川敦（インターラクティブ映像）

この作品は、物理学における「波動と粒子の二重性」に関する以下の説明にインスピレーションを受けて作曲を始めた。「物理学及び物理化学において、波動と粒子の二重性とは、全ての物質やエネルギーは粒子的な性質と波動的な性質の両方を持つという考え方である。」（Wikipediaより）

私は、物理学に詳しい訳ではないが、作曲をするにあたって、自分をとりまく環境 - この世にあるものの成り立ち、自然や宇宙などに興味をもち、そこからインスピレーションを得る事が多い。今回のスネアドラムの作品においては、ドラムの奏法は、単発の点が、粒子としてとらえられ、ロール奏法による強弱の変化を、波動としてとらえられている。楽器によって発生する波動と粒子の共存と、そのリアルタイムの音響変調によって、それらがさらに拡張されることにより、波動と粒子の繊細さとダイナミックさを表現しようと試みた。

この作品には、吉川敦氏にライブ映像の作成をお願いした。「波動と粒子」をキーワードに、音楽と美術という異なる分野に関わる二人の人間がどのような表現を生み出すのか、興味深い制作であった。

（大村久美子）

## 3. フランコ・ドナトーニ：「オマール」（1985）ビブラフォンの為の HIEI（インターラクティブ・グラフィックス）

フランコ・ドナトーニ（1927-2000）は、イタリアの現代音楽の作曲家。後年ミラノ音楽院の作曲科教授とキジアーナ音楽院の客員教授を務めた。このビブラフォンソロのための作品は、アフリカ系イタリア人の打楽器奏者マウリッツィオ・ベン・オマールの為に書かれたものである。ドナトーニの作風は、音型の反復と絶え間ない変奏や、線的な素材を数的秩序で配置するなど、非常に緻密に書かれており、超絶技巧を要する作品が多い。そして、クリアに演奏しなければ、その音楽の構造が全くみえてこなくなり、作品の魅力を半減してしまう。この難曲を、加藤氏は、戦後の現代音楽の中心となったドイツのダルムシュタット現代音楽夏期講習会で1996年に演奏し、クラーニツヒシュタイナー賞を受賞した他、作曲家本人のドナトーニにも絶賛された。加藤氏のレパートリーのCDにも収録されており、その緻密で、色彩豊かな演奏が聴きどころである。

今回の公演の為に、日栄一真氏が、彼の独自の感性で、この作品によせてライブ映像を制作した。（大村久美子）

## 4. 山本裕之：「輪郭主義II」（2010）ビブラフォンと電子音響テープの為の [世界初演]

この曲のイメージはタイトルの通り「輪郭」です。中身を埋めるような和音や充実した響きなどはありません。たぶん『アクション』をテーマに掲げた本日の演奏曲目の中では最も地味な曲かもしれません。ひたすら2台のビブラフォンで音の線を紡ぎ出していきます。うち1台はあらかじめ録音されてスピーカーから流され、もう一台はステージ上でそれに合わせて演奏されます（ですから実際に見えるのは1台だけです）。しかし録音された方は全体を通して音が4分の1音（つまり半音のさらに半分の音程）下げられているので、いわば調律が均等にずれているような状態になっています。しかしタイトルで「輪郭」などといいつつも、現実の音には形が、即ち実態が無く、物理的或いは認知心理学的などいろいろな意味で曖昧な存在であるという考えを私はずっと持っていて、そんな音を素材に作られた音楽にも曖昧な要素がきちんと反映されなければならないと考えているのですが、4分音をずらしてピッチをぶれさせ、音の焦点を定めないというのは一つの方法論たり得るのではないかと、思っています。趣旨をよくご理解くださり実質的に二人分の演奏を一人で引き受けてくださった加藤さん、そして演奏の機会を与えていただいたニンフェアールの方々に深く感謝致します。（山本裕之）

## 5. エドムンド・カンピオン：「ルージング・タッチ」（1994）ビブラフォンと電子音響テープの為の

エドムンド・カンピオン(1957-)は、コロンビア大学博士課程修了、フランスでグリゼーに学ぶ。1993年にIRCAMで研鑽を積み、この作品は、1994年にIRCAMで作曲された。ビブラフォンサンプルとライブ演奏のビブラフォンの音と共時する（シンクロする）ビブラフォンのような音でエレクトロニクス・パートは作られている。演奏家は、肉体的な楽器と人間の接触（タッチ）をつなぐことで、現実世界と相互作用している。演奏家は、肉体的、精神的な限界をもっている。一方で、エレクトロニクスの世界では、永遠に想像できるパッセージを続けることが可能である。人工的なエレクトロ・アコースティック環境は、限定のない運動や色により表現能力の欠乏に取って代わる。この作品の中での演奏家は、無邪気な精神、相互の協調性の精神でエレクトロニック世界との関係を始める。作品が終わるにつれて、エレクトロニクスは、人間の演奏の限界を超える。結果として、演奏家は、演奏のより表現的な局面を奪われて、「接触を失う」-” Lose touch” 。最後には、機械と人間が、異なった世界に占められて、協調性の錯覚が、粉碎される。作曲家のジョン・ハービソンに捧げられている。

## 6. 伊藤美由紀：「空間透明度I」（2010）

### ビブラフォン、アンティーク・シンバルと電子音響の為の [世界初演] ネイト・ペーゲル（ヴィデオ）

この作品は、今年コンサートの為を訪れたメキシコで、メキシコ人建築家のルイス・バラガンの自邸を訪れてインスピレーションを受けたことに基づいている。バラガン邸は、メキシコ市内にあふれるメキシカンピンクを生かした壁の色、空中に浮かんでいるかのように見える不思議な階段をはじめ、画期的な色遣い、空間配置がされており、天井には一切電気はついておらず太陽光にこだわり、計算尽くされた窓の場所、大きさによって、微妙な光、影が空間を作り出すように設計されている。まるで迷宮のようにそれぞれの部屋は繋がっている。次の部屋に入るたびに新たな発見があり、また、それぞれの部屋との関係をもっている。バラガンは、「建築は、内側から考えるべきです。」と言っている。外から見ただけでは想像のつかない彼の精神世界が、建築物の内部に創造されているかのようなのである。私は、彼の建築空間を音楽空間のように、作曲と建築とのつながりを感じた。

ビブラフォン、アンティーク・シンバル、加藤さんに録音協力をしていただいたベルタイプの打楽器音サンプルを加工したエレクトロニクス音を含んだ全てメタリックな音を使っている。それらの音で、バラガン邸から感じ取った色、光、空間を音響空間に創造しようと試みた。

また、映像は、アメリカ人メディア・アーティストのネイト・ペーゲル氏が制作して下さった。今までに、「東京メトロ」アルトサクソとエレクトロニクスの為の「見えない環」の2作品でコラボレーションを行っている。

今回のコンサートでは、加藤さんのライブ演奏のダイナミクスのデータにより、Max/jitterを使用して、ペーゲル氏の映像作品上に光の効果を加えるようにプログラミングしてある。（伊藤美由紀）

カパサタル・ダンスカンパニーと「バイオーム」という作品の為に仕事をした際、彼らのデザインした金属製の彫刻を使用した曲芸的な振り付けをみて、インスピレーションを得た。この彫刻のオブジェを使用したパフォーマンスを何もないスタジオで撮影した。そのヴィデオを平面的なものとする立体的なものにすることで、新たな振り付けを試みた。スピードを変えたり、逆回転をしたり、回転させることで重力に反抗させることによりヴィデオを編集している。ヴィデオを使って新たな振り付けを探求することに関心があった。（ネイト・ペーゲル）

## 7. スティーヴ・ライヒ：「ヴァーモント・カウンターポイント」（1982） ビブラフォンと電子音響版（2010） [世界初演]

スティーヴ・ライヒ（1936-）は、短いフレーズの繰り返しを多用するミニマルミュージックを代表するアメリカ人作曲家。2006年には、第18回高松宮殿下記念世界文化賞の音楽部門を受賞している。加藤氏は、この1年でライヒの70～80年代の作品を3曲パーカッション用にアレンジしている。すべて自発的にはじめたことで、楽器に対する編成なども自分のアイデアで、それをライヒに相談し、許可を取って制作している。この曲については、オリジナルは、テープパート部分としての3本のアルトフルート、3本のピッコロ、1本のソロと、1本の生演奏の為に記譜されているが、ビブラフォンのためにアレンジをするアイデアを思いつき、本日は、その版の世界初演である。加藤氏に演奏に際して気をつけていることを質問したところ、「とにかく曲の意図しているクリアな構成音のディテール（細部）とトランジション（音のつながり）です。すべてのライヒの曲に通じることですね。」と、ライヒの音楽に対する深い理解を伺わせる。

本日の公演では、あらかじめ録音されたパートの再生にあわせて演奏されるが、その録音は加藤氏自身の演奏によるもので、名古屋芸術大学講師でサウンドエンジニアの長江和哉氏の協力より作成された。（大村久美子）



**加藤訓子 (打楽器) *Kuniko Kato (percussion)***

桐朋学園大学卒業。同校研究科在席時から渡欧し、ロッテルダム音楽院へ留学。首席で卒業。数々の世界的な指揮者や作曲家から注目される打楽器奏者として世界を舞台に活躍する。その技量、音楽性、芸術性の高さは、学生時代から注目され、ソリストとしてマリンバ、打楽器にその天性の才能を発揮する。1995年第1回「リー・ハワード・スティーブンス国際マリンバコンクール」準優勝、1996年ドイツ、ダルムシュタット国際現代音楽祭にてクラニヒシュタイン賞受賞、2000年米国パーカッション・アートソサイエティより世界35人のマリンバリストに選出、2002年愛知県豊橋市より文化賞奨励賞を受賞。武満徹、スティーヴ・ライヒやフランコ・ドナトーニをはじめ、著名な作曲家や演奏家とも数多く共演、ソロ以外でもアンサンブル・ノマド、サイトウキネンオーケストラ、アンサンブル・イクトゥス（ベルギー）など国内外のグループへ参加。クラシック音楽の古典から同時代音楽作品まで幅広いレパートリーを持ち、優れた音楽的感受性と芸術性を併せ持つ。NHK芸術劇場のテーマソング提供やダンス、演劇事業の音楽監督など異ジャンルとのコラボレーションにも積極的に取り組む他、自己プロデュースによる企画も行い、昨年の「SOUND SPACE EXPERIMENT vol.1」（ドラム缶ライブ）は好評につき、今年も「Steel drum works」として彩の国さいたま芸術劇場、伊丹AI・HALL他、愛知、横浜でも再演される予定。日本を代表する打楽器奏者としてグローバルに幅広いフィールドで活躍している。愛知県豊橋市出身、米国在住。www.kuniko-kato.net

**ネイト・ペーゲル (メディア・アーティスト) *Nate Pagel (media artist)***

サンフランシスコ在住のアメリカ人メディア・アーティスト。ライス大学（ヒューストン）、シドニー大学大学院卒業。アップルコンピューター会社で働いている間に、実験的なマルチメディア作品制作を始める。メディア・アート作品は、23カ国以上で展示され、コスタリカ、イタリア、オーストラリア、アメリカでは、テレビで放映され、60以上の受賞がある。国連、サンフランシスコ現代美術館(SFMOMA)、世界自然美術館、シャリール・ダンスカンパニー、カバシートル・ダンスカンパニー、プラネット・マガジンなどから作品委嘱があり、ビデオ、サウンド、グラフィック、ウェブ、バーチャルリアリティ、インターラクティブテクノロジーを使い、振付師、作曲家、ビデオアーティスト、デザイナーなど様々な分野のアーティスト達とコラボレーションを行っている。

**HIEI (インターラクティブ・グラフィックス) *HIEI (interactive graphics)***

1990年代よりコンピュータを使った音楽プログラミングを始め、さまざまなテクノロジーを取り入れながら作品を製作をしています。主な活動歴は、ニューヨーク、日本のレーベルからの楽曲のリリース、フランス・イェール国際モードフェスティバルでのファッションショーへの楽曲提供、CM、Web等の音楽制作、ヤマハ株式会社電子楽器事業部研究開発室でのサウンド製作。2005年に入ってから、音から映像や電子デバイスをリアルタイムにコントロールして生成する手法を取り入れ、2008年愛知児童総合センターにて音と光によるメディアアート作品の展示、同年ドイツの芸術とメディアの為のセンターZKMでは映像の中に照明装置を取り込んだ作品で大村久美子氏とコラボレーション行い、2010年にはメキシコ市国立自治大学、モレリア市CMMASにて伊藤美由紀氏の作品「もうひとつの声」からリアルタイムに映像を生成するプログラミングを担当。名古屋芸術大学音楽学部、名古屋大学情報文化学部非常勤講師。www.macrophagelab.com

**吉川敦 (インターラクティブ映像) *Atsushi Yoshikawa (interactive video)***

名古屋芸術大学音楽学部音楽文化応用学科サウンドメディア専攻、名古屋芸術大学大学院音楽研究科音楽学音楽制作専攻終了。同大学のサウンドメディアの一期生でmax/mspの講座が初めて開講されたときよりmax/mspを使用し始める。在学中の演奏会ではオーケストラとmax/mspのための作品や歌とmax/mspによる即興的な作品などを発表。近年は映像プロダクションにも所属し、テクノロジーを学ぶことでアートとテクノロジーの架け橋となりjitterを使用した映像制作も行っている。

- more info -

♪ Max/msp,jitter (ソフトウェア) : 音楽のためのグラフィック・プログラム開発環境。IRCAM (パリ) においてミラー・パケットを中心に1986年から開発が始まり、のち、Cycling74 (サンフランシスコ) とともに販売される。リアルタイムでのインターラクティブ・ソフトウェアとして現代音楽の世界において、限りない可能性を与えている。Jitterは、映像処理に使われる。今回のプログラムのなかで、伊藤美由紀、大村久美子の作品では、音響と映像において、ドナトーニの作品では、映像において、このソフトウェアを使用している。ニンフェアル公演では、毎回の公演において、Max/msp, jitterを使用し音響、映像において新たな試みを行っている。



### 山本裕之 (招待作曲家) *Hiroyuki Yamamoto (guest composer)*

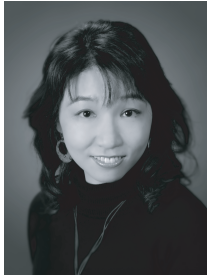
1967年山形市生まれ、主に神奈川県で育つ。1992年東京芸術大学大学院作曲専攻修了。在学中、作曲を近藤譲、松下功の両氏に師事。これまでに第58回日本音楽コンクール(1989)、フォーラム91(カナダ/1991)、ガウデアムス国際音楽週間'94(オランダ/1994)、現音作曲新人賞(1996)、BMW musica viva作曲賞(ドイツ/1998)、ISCM世界音楽の日々(ルクセンブルク/2000、横浜/2001)、武満徹作曲賞第1位(2002)、第13回芥川作曲賞(2003)など、様々なコンクールや音楽祭に入賞、入選している。作品はLe Nouvel Ensemble Moderne、Ensemble Contemporain de Montreal、Trio Fibonacci(以上モントリオール)、Nieuw Ensemble(アムステルダム)、バイエルン放送交響楽団(ミュンヘン)、ルクセンブルク管弦楽団、東京フィルハーモニー交響楽団など、各地の演奏団体により演奏され、またラジオで放送されている。演奏家や演奏団体、放送局等からの委嘱を受けて作曲を行っている傍ら、1990年より作曲家集団《TEMPUS NOVUM》に参加、2002年よりピアニスト中村和枝氏とのユニット《claviarea》を開始するなど、様々な活動を展開している。2002年第51回神奈川文化賞未来賞受賞。2009年より愛知県立芸術大学准教授。

## ニンフェールメンバー



### 伊藤美由紀 (作曲) *Miyuki Ito (composer)*

愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程(NY)、コロンビア大学博士課程(NY)修了。芸術音楽博士(DMA)。ピエール・シャルベ、トリスタン・ミュライユらの各氏に師事。文化庁芸術家在外研修員として、IRCAM(フランス国立音響研究所)にて研鑽を積む。Boris & Edna Rapoport賞(NY)、名古屋文化振興賞、日本交響楽振興財団作曲賞入選、フランコ・エヴァンゲリスティ国際コンクール優勝(ローマ)など受賞。ハーモニアオペラカンパニー(NY)、東京オペラシティ、ミュージック・フロム・ジャパン(NY)、アタックシアター(ピッツバーグ)、オニックス・アンサンブル(メキシコ)などによる作品委嘱ほか、カーネギーホール(NY)、レゾナンス・フェスティバル(パリ)、ISCM世界音楽の日々(香港)、国際コンピュータ音楽会議(マイアミ)、SMC07(ギリシャ)、Re:New08(デンマーク)をはじめ、世界各国の現代音楽祭で作品が演奏される。ゲラルド・オーシタ助成とともにカリフォルニア・ジェラシ・アーティストレジデンシー(2005)、国際交流基金助成とともにCMMAS(メキシコ国立音響研究所)(2010)で創作活動を行う。「伊藤美由紀作品集 時の砂」がALCD-80からリリース。「古代の息吹をしのぶ。」が、ミラノのスヴィーニ・ゼルポーニ出版社から2010年楽譜出版予定。日米作曲家グループ：JUMP(日米：新しい音楽の展望)企画代表。現在、名古屋芸術大学、千葉商科大学非常勤講師。www.miyuki-ito.com



### 大村久美子 (作曲) *Kumiko Omura (composer)*

東京芸術大学作曲科を卒業後、ドイツ・エッセンの Folkwang 大学にて、作曲と電子音楽を学び、IRCAM(フランス国立音響研究所)にて電子音楽の研鑽を積む。帰国後、東京芸術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻にて、インターメディア・アートの研究をする。卒業後、文化庁芸術家在外研修員として再び渡独し、引き続き現在もカールスルーエのZKM(芸術とメディアの為のセンター)の客員芸術家として創作活動を行っている。作品は、入野賞オーケストラ部門(1994)、ガウデアムス作曲賞グランプリ(オランダ1998)、ハノーファー・ビエンナーレ最高位(ドイツ1999)、ノルトライン・ヴェストファーレン州若手芸術家賞(ドイツ2000)、ACL入野義朗国際作曲賞(2000)、武生作曲賞(2004)、日本現代音楽新人賞(2005)などを受賞し、ヴィッテン音楽祭、バイエルン放送局主催ムジカ・ヴィヴァ、南ドイツ放送局主催アルス・ノヴァ(ドイツ)、フェスティヴァル・アカント、フェスティヴァル・アゴラ(フランス)、ブルーデント音楽祭(オーストリア)、ミュージック・フロム・ジャパン(ニューヨーク)、国際コンピュータ音楽会議などで演奏されたほか、昨年3月には、ZKMにて作品個展が開催された。フォンテック社の「日本の作曲家」シリーズから作品集CDがリリースされている。

ニンフェール：2004年設立。ニンフェとは、フランス語で睡蓮(すいれん)の意味で、ギリシア神話の乙女ニンフともかけてあり、またこのニンフという単語はさなぎという意味もあります。フェールはフランス語で、アートを意味し、私達はこの団体名のもとに、美しく新鮮で、これからの可能性を秘めた芸術作品を皆様にご紹介したいと願っております。これらのニンフェール公演は、愛知県内外で好評を博し、これまでに朝日新聞(2005、2006、2007、2009)、モストリークラシック(2007)などの記事にとりあげられる他、発表された作曲メンバーの作品が、国内外(東京、ドイツ、デンマーク、アメリカ)で再演されるなど、一回の公演にとどまらない広がりを見せています。  
nymphheart@yahoo.co.jp

### 【ニンフェール過去の公演実績】

#### ♪ニンフェール第1回公演：「古楽器の現在」

名古屋市港文化小劇場 2005年5月21日 名古屋市港文化小劇場との共催、名古屋市文化振興事業団企画公演、国際芸術フェスティバル参加公演  
助成：フェスティバルメセナ助成、サントリー音楽財団推薦コンサート 後援：名古屋芸術大学音楽学部、 協力：テレビマンユニオン  
出演：ガース・ノックス(ヴィオラ・ダモーレ、ヴィオラ)、鈴木俊哉(リコーダー)

#### ♪ニンフェール第2回公演：「林、森、虹、息-声と弦による贈り物」

名古屋市港文化小劇場 2006年5月13日 名古屋市港文化小劇場との共催、名古屋市文化振興事業団芸術公演  
助成：朝日新聞文化財団助成、サントリー音楽財団推薦コンサート 後援：名古屋芸術大学音楽学部  
出演：天羽明恵(ソプラノ)、鈴木大介(ギター)、後藤龍神(ヴァイオリン)

#### ♪ニンフェール第3回公演：「音とテクノロジーの対話」

愛知県芸術文化センター 2007年9月26日 愛知県芸術文化センターとの共催、「AACサウンドパフォーマンス道場」関連企画  
助成：芸術文化振興基金、ロームミュージックファンデーション、サントリー音楽財団推薦コンサート 協力：名古屋アメリカンセンター  
後援：名古屋芸術大学音楽学部  
出演：八木美知依(箏)、エリオット・ガッテンニョ(サクソフォン)、カール・ストーン(ラップトップ・ミュージック)、夢宙屋(照明アーティスト)

#### ♪ニンフェール第4回公演：「音の身振り・動きの響き」

名古屋市千種文化小劇場 2008年5月30日 名古屋市芸術文化財団活動助成事業  
助成：芸術文化振興基金、ロームミュージックファンデーション、野村国際文化財団、サントリー音楽財団推薦コンサート  
後援：名古屋芸術大学音楽学部  
出演：多井智紀(チェロ)、太田真紀(ソプラノ)、朝川万里(ピアノ)、神田佳子(タップ)ほか

#### ♪ニンフェール第5回公演：「息の領域」

名古屋市千種文化小劇場 2009年6月5日 名古屋市芸術文化財団活動助成事業 サントリー音楽財団推薦コンサート  
後援：名古屋芸術大学音楽学部  
出演：カミラ・ホイテンガ(フルート)、森川栄子(ソプラノ)、榎沢純(映像インスタレーション)、HIEI(空間デザイン)

主催：NymphéArt (ニンフェアール)

(財) 名古屋市文化振興事業団

<協力スタッフ>

ライブレコーディング

名古屋芸術大学音楽学部 音楽文化創造学科 サウンド・メディアコース

教員：長江和哉

学生：中村優里、松永麻耶、常岡千波、伊奈輝徳

音響：堀山愛子

舞台：薬師航太、堀諭史

案内：松井拓磨、村田恵里奈

(\*名古屋芸術大学音楽学部音楽文化創造学科サウンドメディアコース協力)